

近代に至るまで、福島市の大部分は「信夫郡」に属していました。この郡名や信夫山に関する名前の由来はいろいろな説があり、アイヌ語の「広い平原」や「石の山」であるとか、『信達一統志』では篠が生えていたことから「篠生」と称したなどと言われています。

一方で、信夫という読みは「しのぶ」(人や物を思い慕うこと)、「忍ぶ」(我慢する、隠れること)と通じることから、情緒や意味を持つ土地として和歌に詠まれました。また阿武隈川も「おうくま川」と呼ばれ、「あこが逢う」(人と会うこと)と通じることから、都の人たちは強い憧れをもっていました。このような和歌に多く詠みこまれた地名を歌枕といいます。

歌枕に詠まれた「しのぶもぢずり」

みちのくから運ばれて来る珍しい物産も都人の興味の対象となりました。石の表面で絹に植物の色素を染め上げた「しのぶもぢずり」は信夫地方の名産で、美しい模様は都で流行しました。小倉百人一首に収められた河原左大臣 源 融の和歌「みちのくのしのぶもぢずり たれゆえに 乱れそめにし 我ならなくに(みちのくの「しのぶもぢずり」の染めの文様



43. 文知摺石

のように、私の心も乱れてしまいました。それは他ならぬあなたのせいです。)」の背景には遥かなみちのくに対する思いがあったのです。

また、この歌は源融が信夫の里に住む虎女という女性に贈った歌とも言われ、次のような伝承が残されています。

嵯峨天皇の皇子である源融が陸奥国に出向いた際に、信夫の里の娘である虎女と恋仲になりましたが、融はやがて都に戻らねばならず、二人は離ればなれになります。融を思う虎女が文知摺石で絹を染め上げていると、思いが通じたのでしょうか、石の表面に融の顔が映し出されたと言います。この文知摺石は融の顔が映ったことから「鏡石」とも呼ばれ、山口の文知摺観音の文知摺石が有名です。また、宮代の山王様として親しまれる日枝神社にも鏡石といわれる石があります。



文知摺観音付近図

注 文知摺石の表記や読み方には諸説あるが、本書では文知摺石(もちずりいし)で統一した。

奈良・平安時代のくらし～台畑遺跡(丸子・南矢野目)～

723(養老7)年の三世一身の法、743(天平15)年の墾田永年私財法により、未利用の土地を開墾するとその土地の私有が認められることになり、豪族や農民による開墾が盛んに行われるようになります。台畑遺跡は、水田の開墾によりつくられたむらで、平安時代の水田跡と竪穴住居や掘立柱建物がある居住の場が見つかりました。開墾により経済的に豊かになった有力者が掘立柱建物に住み、一般の農民は竪穴住居に住んだようです。



台畑遺跡付近図

福島市内では、10世紀には一般農民の住まいも掘立柱建物になり、縄文時代から続いた竪穴住居はなくなります。

水田の水路からは、「得万」などと書かれた墨書土器が数多く発見されています。豊作を願うまつりに使われたものと考えられます。



掘立柱建物跡 四角の白線部が掘立柱建物の跡(横が重複)。掘立柱建物は、8世紀末～9世紀初めに出現した。

竪穴住居跡 竪穴住居は、10世紀まで一般農民の住まいとして使われた。

水田跡



45. 墨書土器 まつりに使われた「得万」と書かれた土器が水田の水路から出土した。

44. 台畑遺跡 写真中央より下の黒色土の区域が水田跡で、中央左の黄色土の区域で水田を耕作した人が居住した竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されている。

コラム むらの祭り

『令集解』儀制令春時祭田条には「村ごとに社があること、祭りの日には飲食を準備し、すべての男女が集まり、そこで国家の法が告知されたことや祭りは春・秋2回あった」ことが書かれています。

農事を開始するにあたり豊作を願う春祭りと実りをもたらしてくれた神に感謝する秋祭りの様子が記されています。神に食事を献上し、村人全員で神と飲食を共にする様子は現在の祭りの原形といえます。米から作られる酒は神への献上の象徴的なものとされ祭りにも欠かせないものでした。

王老杉

吾妻地区には、次のような王老杉(おろ杉)の話が伝わっています。

聖武天皇^{しょうむてんのう}の時代(724~749年)に、笹木野^{ささきの}字折杉^{おろすぎ}に2000年もたつと思われる大杉がありました。いつか杉の精^{せい}が若者に化け、近所で一番美しい娘「おろす」に通い続けたそうです。「おろす」が、ある晩若者の着物の裾^{すそ}に糸をつけた小針をさし、夜があけて糸をたどって行くと、大杉にささっていたそうです。

村の相談でこの化け杉を切ることにになり、斧^{おの}で切り倒しはじめましたが、翌日になると元通りになってしまい、倒すことができませんでした。そこでよもぎの精に聞くと「木を切ることができる木っ端^こを、火で焼いてしまえばもとの通りにもどらない」と教えられ、その通りにすると、ようやく大杉を切ることができたそうです。

笹木野の「折杉」・「小針」の地名は、この伝説から生まれたとされています。

王老杉の伝説は、『信達古語名所記』^{しんたつこごめいしよき}、志田正徳の『信達一統志』^{しんたついつどうし}でも紹介されています。

清明塚と道満塚

王老杉の伝説では、のちにこの杉が祟^{たた}るのでこれを祓^{はら}うために陰陽師を頼み、安倍晴明^{あべのせいめい}と蘆屋道満^{あしやどうまん}が来たので、現在の清明町^{せいめいちやう}や昔あった道満塚の地名が残ったと伝えています。

『信達一統志』では「道満塚清明塚」の項には、笹木野村の大杉によって日陰になるので、役所に訴え切り倒しました。ところが杉の精が朝廷に祟りをしたので、



46. 王老杉稲荷神社



王老杉伝承地付近図



47. 清明塚(「福嶋村絵図」部分) 真浄院・誓願寺の上方に「セメシツカ」と書かれている所が清明塚。
(安斎直己家文書 県歴史資料館寄託)

朝廷は安倍清明と蘆屋道満の二人を派遣し、天皇の病気が治るよう祈らせました。村人は杉の精を祀るため壇を築き、崇りをなだめ、杉の精を神として祀りました。これが杉妻大明神です。と伝えています。

なお、清明塚は安倍清明の功績を讃えた塚、道満塚は蘆屋道満が祈祷した祭壇とも言われています。

安倍清明と稲荷神社

福島稲荷神社には、次のような話が伝わっています。

一条天皇(986～1011)の時、987(永延元)年安倍清明が天皇の詔により奥羽に下り、福島の地にさしかかり、山水の風致、自然の景勝に目を見張ると共に、地味肥沃で農耕に適し、将来大いに有望であるとして、ここに社を建て、衣食住を司る豊受比売命を迎えてまつり、里の総鎮守としたことに始まり、のち清明の孫清明が社殿を改築しました。

杉妻荘・余目荘の由来

『信達一統志』では、信夫郡については、余目荘を摺上川と松川の間、杉妻荘を松川と須川(現荒川)の間、名倉荘を須川の南、阿武隈川沿岸の村々の広大な荘とし、川の流れで概ね区分されています。

この各荘の名称の由来について、王老杉の伝説では、大杉の形から笹木野村を含むこの地方を杉妻荘と呼ばれていたと伝えており、『信達一統志』では、杉の精と女(妻)の話であるので、杉妻荘と呼んでいると伝えていきます。

また、笹木野村の北にある余目荘は、大杉の日陰の範囲を超える(余る)地であることから、余目荘と呼んでいると伝えていきます。また『信達古語名所記』では、杉の精が忍んで通ったことから「しのぶ郡」とし、後に信夫と書き改めたとも伝えており、王老杉伝説は、壮大な伝説であることがわかります。



真浄院・福島稲荷神社付近図

- ①清明塚推定位置
- ②道満塚推定位置



48. 福島稲荷神社 (宮町)



49. 『信達一統志』における信夫郡内三荘の範囲

トピック 3

つぐのぶ ただのぶ 佐藤継信・忠信と奥州藤原氏

信夫郡は藤原氏の莊園(信夫庄)となり、佐藤氏はここを治める信夫庄司となりました。信夫庄司の佐藤基治を含む信夫佐藤氏は、平泉の奥州藤原氏の一族でした。

佐藤基治は大鳥城(飯坂町)を築いたと言われ、佐藤一族の菩提寺は同じ飯坂町にある医王寺で、佐藤基治・乙和夫婦や佐藤継信・忠信兄弟などの佐藤一族の墓と伝えられている石造供養塔があります。



大鳥城・医王寺付近図

信夫佐藤一族で最も知られているのが、平泉の藤原秀衡に命じられ、源義経に従った佐藤基治の息子継信・忠信兄弟です。兄弟は義経とともに平氏と戦い、義経の身代わりとなって亡くなりました。兄弟の活躍は、後に書かれた『吾妻鏡』・『平家物語』・『義経記』などに登場し、のちに『継信忠信絵巻物語』もつくられました。また、「摂待」・「八島」・「忠信」などの謡曲、「狐忠信」・「義経千本桜」などの歌舞伎・浄瑠璃で広く知られるようになりました。

また、悲劇の英雄義経に対する人々の深い同情(判官びいき)は、義経へ忠義を尽くした佐藤兄弟や母乙和にも及び、全国各地で伝説として語り継がれています。

コラム 大鳥城

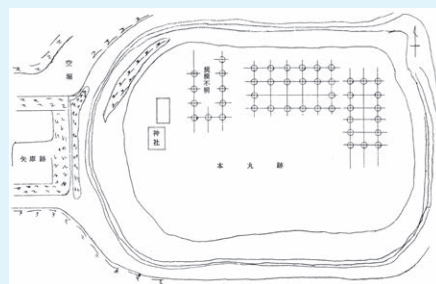
大鳥城は、『信達一統志』では1157(保元2)年佐藤基治が築城したとしていますが、築城者は不明としています。

1972(昭和47)年には館ノ山公園北側で発掘調査が実施され、3棟の掘立柱建物跡が発見され、「矢庫跡」の土塁はさらに土を盛りあげ二度築かれたことが確認されました。時期は遺物から戦国時代と推定されました。その後、館ノ山公園整備に伴い十数回の調査(試掘調査含む)が実施されています。

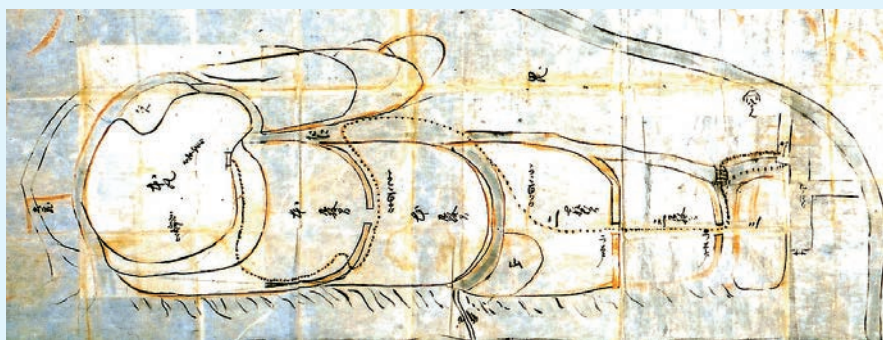
また、2003(平成15)年に従来の大鳥城とは異なる貴重な大鳥城中根家絵図が見つかりました。中根家は福島藩主本多氏の家老職の家柄で、中世に描かれ保管されていた絵図を写したと考えられています。

大鳥城中根家絵図と2500分の1の地図を復元的に重ね合わせた図が作成されています(鈴木 啓『大鳥城中根家絵図について』複合図)。今回その図に今までの調査成果等を補足して掲載しました。

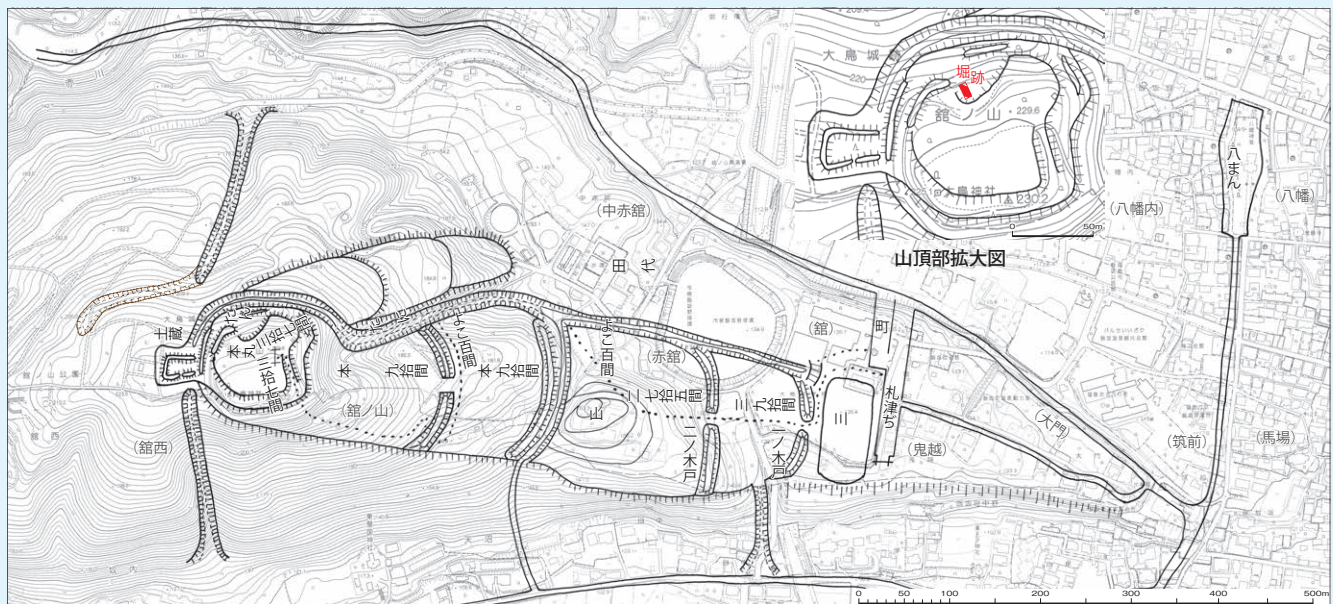
絵図では、山頂部は「本丸」と記載され、その東下段も「本」(本丸)とし東側に虎口(出入口)を有する土塁が見られます。さらに東の下段も「本」で東側は堀と土塁で区切り、その東には「二」(二の丸)とあり、その東の「三」(三の丸)との境は虎口を有する土塁で「二ノ木戸」とあり、



50.1972(昭和47)年山頂部調査で発見された建物跡
(『大鳥城跡発掘によせて』より)



51.大鳥城中根家絵図(中根家蔵)



52.大鳥城図 鈴木啓『大鳥城中根家絵図について』の複合図(黒文字：中根家絵図注記)に、発掘調査による発見遺構は赤色で、米軍航空写真による推定遺構は茶色で、現字名を()で補足表示した。

「三」の東端には「一ノ木戸」とあります。その東には「三」と記載のみです。絵図の「八まん」は八幡神社とされ、八幡内の字名等から神社は広範囲に及んでいたことも想定され、「三」から東側については今後検討が必要ではないかと思えます。

「本丸」南東端での調査結果、築城が14世紀前半で生活の場として15世紀後半まで継続し、その後大規模な整地事業を行い16世紀にも存在したことが明らかになりました。調査結果から、佐藤基治時代の居館きょかんは、現在の飯坂球場や大島中学校がある字額なで付近の平坦な地域にあったのではないかと考えられています。

コラム 佐藤継信・忠信の伝説

全国各地には、佐藤兄弟に関する伝説が伝わっています。そのいくつかを紹介します。

- ・宮城県角田市岡には、「伝^{でん}佐^さ藤^{とう}継^{けい}信^{しん}忠^{ちゅう}信^{しん}供^{こう}養^{よう}塔^{とう}」（市指定文化財）と称され、俗称双子石とも呼ばれる板碑があります。
- ・長野県長野市の善光寺境内にある「石造宝篋^{げんこう}印^{いん}塔^{たつ}」（市指定有形文化財）は、佐藤兄弟の供養塔の伝説が伝えられています。
- ・京都市にある京都国立博物館の敷地内にある「馬^{うま}町^{まち}十三^{じゅうさん}重^{じゅう}石^{せき}塔^{とう}」は、江戸時代には佐藤兄弟の墓と伝えられていました。
- ・愛知県名古屋市区の法輪寺には、佐藤兄弟及び乙和の供養塔として伝承されている宝篋印塔があり、さらに佐藤兄弟と伝えられている木像や位^い牌^{はい}があります。



- ・愛知県名古屋市守山区の法輪寺^{ほうりんじ}には、佐藤兄弟及び乙和の供養塔として伝承されている宝篋印塔があり、さらに佐藤兄弟と伝えられている木像や位牌^{いはい}があります。

コラム おとわ
乙和の悲しみ

乙和の^{つばき}椿(医王寺境内)

医王寺の境内にある椿は、佐藤継信・忠信を失った母乙和の深い悲しみと慕情が乗り移ったかのように、花を開かずにつぼみのまま落ちてしまうことから、いつしか乙和の椿と呼ばれるようになりました。

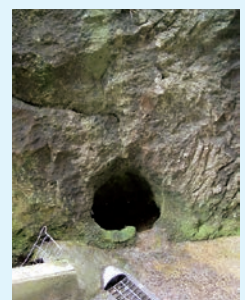
乙和の清水(飯坂町^{はこゆ}波来湯公園)

継信・忠信が義経に従い戦いに出た後、乙和は二人のわが子を想うたびにここに来て自分の姿を清水に映しては、二人に会った思いをして城に戻ったといわれ、別名「姿見の清水」と伝えられています。

また、継信・忠信の妻若桜と楓が夫の供養のため波来の薬師に
行く途中、^{わかさくら} 渴きをおぼえたのでこの清水を汲もうとした時、継信・^{かえで}
忠信の生前の姿がありありと水底に見えたので、この名がついた
とも伝えられています。

53.上：佐藤兄弟・乙和供養塔(法輪寺)

54. 下：佐藤継信(右)・忠信(左)木像(法輪寺)
(2004年撮影)



注 宝篋印塔 供養塔や墓碑塔として建てられた塔。

石那坂の戦いと阿津賀志山の戦い

源頼朝は、奥州藤原氏を倒し全国統一をするため、1189(文治5)年7月総勢28万余騎を三手に分け、平泉に向かいました。白河の関を越えるとき、頼朝の部下、梶原景季は

秋風に 草木の露を 払わせて 君が越れば 関守も無し
と詠みました。福島県域が頼朝の支配下に入っていたことを示しています。

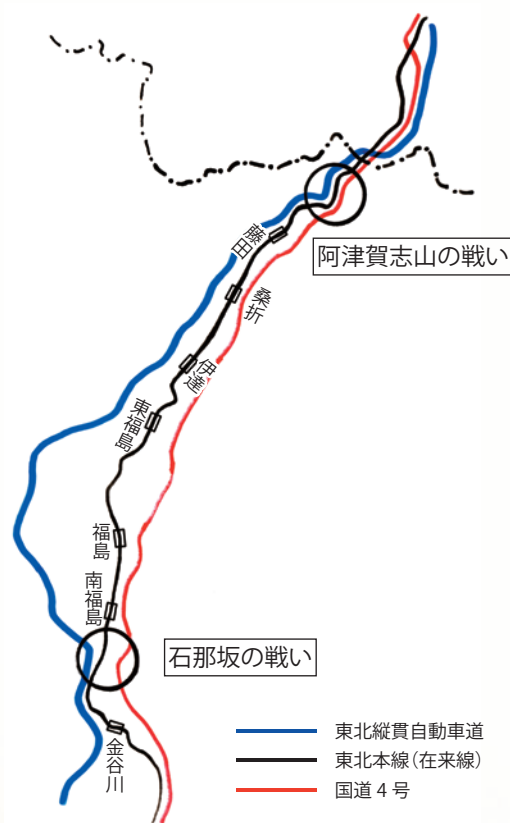
奥州藤原氏は、頼朝をくい止めるため、福島盆地の入口の石那坂周辺(平石)に第一の防塁を、県境の阿津賀志山(伊達郡国見町)に第二の防塁を築き、前者には信夫庄司佐藤基治を、後者には平泉の本隊を配置して備えました。基治は、頼朝の大軍は、奥大道を進み、平田の谷地から福島盆地に入ると予測し、谷地の末端に砦城を築き待ち受けました。8月8日鎌倉勢は、軍勢を二つに分け、石那坂には常陸入道念西(伊達氏の祖)らを派遣し、死闘の結果、鎌倉勢が佐藤庄司以下の首をあげて勝利し、阿津賀志山頂にさらしたとあります。二重の堀を掘って阿武隈川の水を入れ、万全かと思われた阿津賀志山の防塁も、鎌倉勢の工作隊が持参の鋤で堀を埋めて突破口を造り、一部は背後に廻って攻め、攻略しました。この後は大きな戦いもなく、鎌倉軍は、平泉に入り全国統一を成し遂げました。

コラム なぜ、石那坂と阿津賀志山の麓で戦いがあったのでしょうか？

右の図を見てください。円内の辺りが石那坂の戦いと阿津賀志山の戦いがあった場所です。そこでは、両所とも、国道4号、在来の東北本線、東北縦貫道が集まり接近していることがわかります。これは、この付近は両側から山が迫り、狭い谷になっていることを示しています。ここは、奥大道(松川町浅川～石名坂にかけての尾根道に残っている。)と呼ばれる古代・中世の道路が通っていた所です。奥州平泉方は、鎌倉勢はこの谷を通るだろうと予想して石那坂付近では砦城を、阿津賀志山麓では二重堀を造って鎌倉勢を待ち伏せしました。そしてその通り、鎌倉勢はこの道を通して来たのです。



砦城付近図



57.石那坂の戦い・阿津賀志山の戦い位置図

コラム 「柵を引き、石弓を張り、討手を相待つ」

石那坂の戦いや阿津賀志山の戦いを記録した資料『吾妻鏡』には、石那坂の戦いの様子が書いてあります。その中に「柵を引き、石弓を張り、討手を相待つ」とあります。石弓とは『広辞苑』によれば「石を支える木を城壁・山崖などに架し、傾合いを見計らって木に付けた綱を切って石を転落させ、敵を圧殺する装置」とあります。

この時代の戦いに石弓が使われたことは『奥州後三年記』などにも記録が残されています。福島盆地に下りていくところで、向かってくる佐藤庄司の軍勢に、綱を切って石を落としていったと思われます。昔は、この付近にサッカーボール大の丸く磨かれた石がごろごろあったと言われます。石那坂の戦いで石弓の砲弾として使われた石と思われる。こうした石を鎌倉からもってこで担いできた兵士もいたのでしょうか。



58. 石弓の弾か？！

直径約30cm。

石名坂付近で採集。
(市蔵)



59. 石那坂死戦将士碑(平石字上原)
明治18年建立

コラム 西行法師と佐藤基治

歌人西行は、俗名を佐藤義清といい、藤原秀郷の嫡流で、佐藤基治とは親戚にあたります。

西行は26歳の時、東北への旅に出ました。福島に入ったころは秋になっていました。『新勅撰和歌集巻11』に

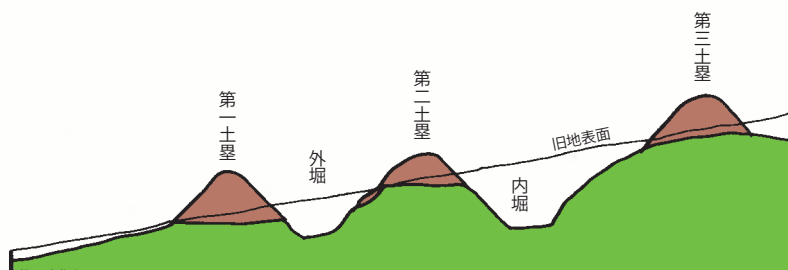
題しらず

東路や 信夫の里に やすらひて

勿来の関を こえぞわづらふ

と詠んでいます。

資料にはありませんが、詠んだ和歌から、西行法師は、親戚の気安さで信夫庄司佐藤氏の居城大鳥城に立ち寄り、若い基治と談笑して旅の疲れを癒したと思われます。「信夫の里に やすらひて」に、若い求道者がつかの間、休息している姿が見えるようです。基治にとっても、父師治(季春)が陸奥守藤原師綱との確執に緊張を強いられていた時期であり、都の文化をもたらず近親の歌人との饗宴は楽しいひとときだったと思われます。



60. 阿津賀志山二重堀断面図 基盤 土塁盛土
『中学校における博物館学習指導の手引き』県立博物館より



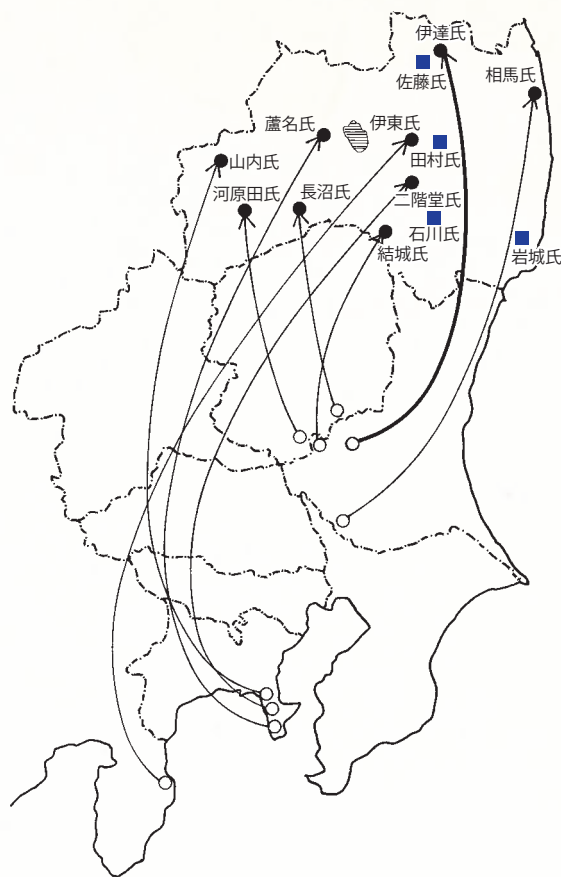
61. 阿津賀志山防壁(国指定史跡)
阿津賀志山から阿武隈川まで4kmに及ぶ二重の空堀と三重の土塁

1189(文治5)年藤原泰衡^{やすひら}を破り、全国統一をなしとげた源頼朝は、戦功のあった関東武士に東北の地を領地として与えました。伊達氏の祖、常陸入道念西^{ひたちいどうねんさい}(伊達朝宗^{ともむね})は、石那坂の戦いの功により伊達郡を与えられ、常陸国伊佐荘(茨城県筑西市)から、鎌倉時代初めに伊達郡に移り住みました。最初は高子岡(伊達市保原町上保原字高子)に住んだといわれていますが、桑折町^{まんしやうじ}の万正寺^{ばんしやうじ}に朝宗^{ぼしやう}の墓所といわれるものがあり、早い時期に桑折に移ったとも考えられます。伊達氏はその後桑折町の赤館^{あかだて}(西山城付近)を本拠に伊達郡を支配します。

1413(応永20)年伊達大膳入道政宗^{だいぜん まついぬまる}の孫、松犬丸^{もち}(後の持宗^{もちむね})が大仏城^{だいぶつじやう}に立て籠もり、関東公方に反乱を起こしましたが、二階堂氏^{ふんだう}が奮闘し、大仏城が落ち持宗は梁川城に移り、梁川亀岡八幡宮造営や輪王寺創建など城下を整備しました。

このころ、伊達氏の一族や家臣が信夫郡各地に城を構えていました。大笹生城^{おおさそう}もその一つです。大笹生字館^{たて}にある大笹生城には伊達氏の一族瀬上氏が居住していました。

大笹生城は標高180mの平坦部^{しやかく}に主郭^{しゅかく}を中心にいくつかの郭^{くわ}を形成し、大手口から下がった東側に城下町を整備。その外側の同心円状に安楽寺・大福寺・東禅寺・鳳台寺(廃寺)を置く典型的な城下町のづくりでした。城の西側には大笹生鉾山があり、金・銀が採掘^{にぎ}されて賑わっていました。大笹生村は、1594(文禄3)年の『高目録』では2537石余で信夫郡第一の村高でした。1532(天文元)年伊達植宗^{てんぶん たねむね}は居城を桑折西山城に移し、この城で戦国家法(分国法)^{せんごく か ほう}「塵芥集^{じんかいしゅう}」を制定しました。しかし、1542(天文11)年、子の晴宗との間で伊達家を二分する天文の乱^{てんぶん}が起こり、勝利した晴宗は西山城を廃城とし、米沢城に移りました。晴宗は、1564(永禄7)年末、家督^{か とう}を輝宗^{ゆず}に譲り、大仏城に移って隠居^{いんきよ}しました。晴宗の墓は宝積寺^{ほうしやくじ}(舟場町)にあります。政宗の父輝宗は、1585(天正13)年、二本松畠山氏を攻めましたが、講和の時に畠山氏に捕殺^{ほ さつ}され、名実ともに政宗は伊達氏の惣領になりました。



62. 関東武士団の本拠地への移住

番号	武士団名	旧本拠地	新領地
①	伊達氏	常陸国伊佐荘	伊達郡高子岡
②	相馬氏	下総国相馬郡	行方郡太田
③	長沼氏	下野国長沼荘	陸奥国長江荘南山
④	結城氏	下総国結城	陸奥国白河荘
⑤	河原田氏	下野国河原田郷	会津郡伊南郷
⑥	山内氏	相模国鎌倉山ノ内	会津郡伊北荘横田
⑦	二階堂氏	相模国二階堂	岩瀬郡
⑧	蘆名氏	相模国三浦半島蘆名	会津郡黒川
⑨	伊東氏	伊豆国田方郡伊東荘	安積郡片平

信達両郡における伊達氏ゆかりの地

○伊達朝宗の墓

桑折町大字万正寺字下万正寺

○西山城(赤館)(国指定史跡)

桑折町大字万正寺

伊達植宗の居城、高館山(191m)の本丸を中心に、西に中館・西館と曲輪が続き石塁が残存。

植宗はここで分国法「塵芥集」を定めた。天文の乱の舞台。

○梁川城跡及び庭園

(県指定史跡および名勝)

伊達市梁川町字鶴ヶ岡
字桜岳地内

伊達氏11代持宗～14代植宗の本拠

○梁川亀岡八幡宮並びに別当寺境域(県指定史跡および名勝)

伊達市梁川町八幡字堂
庭

政宗初陣の時参拝するなど伊達家にとって武神として篤く信仰した神社。

○輪王寺跡

伊達市梁川町字五輪

伊達持宗が1441(嘉吉元)年に創建した。西山城絵図にもあり、のちに仙台に遷る。



63. 梁川城跡及び庭園



○陽林寺(市指定史跡および名勝)

小田字位作山

位作山陽林寺は、1513(永正10)年、伊達植宗が狩りの帰途にこの地で石の上で座禅をしていた盛南舜爽に会い、西山城に招いて学問を受け、師と仰いで寺院を建立。当寺には、舜爽がひたすら禅を組んでいたといわれる座禅石や開基植宗の墓や伊達植宗証状(陽林寺門前の税を免除した証状)などの貴重な古文書(県指定重要文化財)などが残されている。



64. 陽林寺

○宝積寺伊達晴宗墓所

舟場町

伊達晴宗が祖先の霊と合戦で戦死した家臣の霊を慰めるために建立。晴宗の墓所がある。



65. 宝積寺伊達晴宗墓所

○高子岡と亀岡八幡神社

伊達市保原町上保原字高子

亀岡八幡神社は、鎌倉の鶴岡八幡を勧請し、伊達氏の移動とともに、梁川→桑折→仙台と遷った。

○慈徳寺

佐原字寺前

政宗の父輝宗は、畠山義継により不慮の死を遂げ、慈徳寺で火葬された。慈徳寺境内の北側に五輪塔の一部が乗った大岩があり、昔から“輝宗の首塚”と伝えられている。



66. 慈徳寺輝宗の首塚

○大森城

大森字城山

詳細はP34コラム参照

テーマ
9

信夫武士団と南北朝の戦い～^{りょうぜん}靈山を中心に～

1333(元弘3)年鎌倉幕府が滅び、後醍醐天皇が建武政権を樹立しましたが、貴族重視の政治をしたため、足利尊氏を中心とする武士層の反発を受け、政権は2年間で崩壊しました。尊氏は京都に新たな天皇を擁立し、後醍醐天皇は吉野に逃れて政治を行ったため、京都(北朝)と吉野(南朝)と二つの朝廷が並立し、全国が南北朝に分かれて戦う状況が約60年続きました。この時代を南北朝時代と言います。

東北地方は多賀城に国府があり、後醍醐天皇は北畠顕家を陸奥守に任命し東北を治めさせましたが、南北朝時代には、東北の武士たちも南朝方、北朝方に分かれて戦いました。

信達地方には、伊達郡を中心とする地域に伊達氏が、信夫郡に佐藤氏、二階堂氏らの武士がおりました。北畠顕家に陸奥国府の最高首脳の一人として任命された伊達行朝は、その後も南朝方につきました。一方、石那坂の戦いで伊達氏に敗北した佐藤氏は、勢力回復のチャンスとみて北朝方について戦いました。

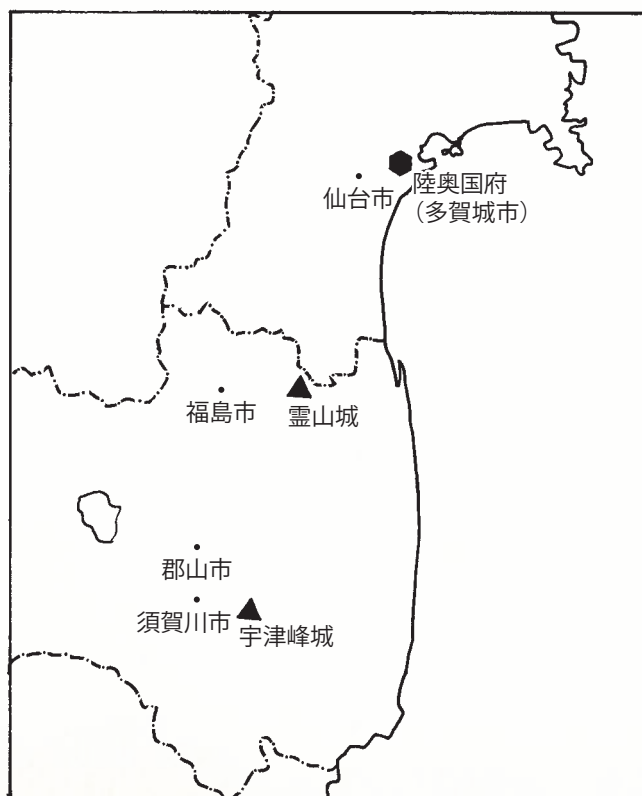
1337年、北畠顕家は国府多賀城を退き、義良親王を奉じ、伊達行朝や白河の結城宗広らを従えて、国府を靈山に移しました。靈山は、海拔805m、断崖絶壁の要害で難攻不落の城でしたが、政治を行うには適した立地ではありませんでした。顕家は、ここに長く留まることはできず、結城宗広・伊達行朝らと再び関西の戦いに向かいました。戦況は次第に南朝方に不利となり、1338年5



67. 霊山城跡(国指定史跡)標高805m



68. 宇津峰城跡(国指定史跡)標高677m



69. 南北朝の争乱関係図

月頭家が戦死し、同年暮には結城宗広も亡くなりました。伊達行朝は、その後関東地方を転戦し、東北に戻りましたが、次第に南朝方の武士の中から北朝方に味方する者も現れ、1343年には結城宗広の子親朝が足利尊氏に従いました。

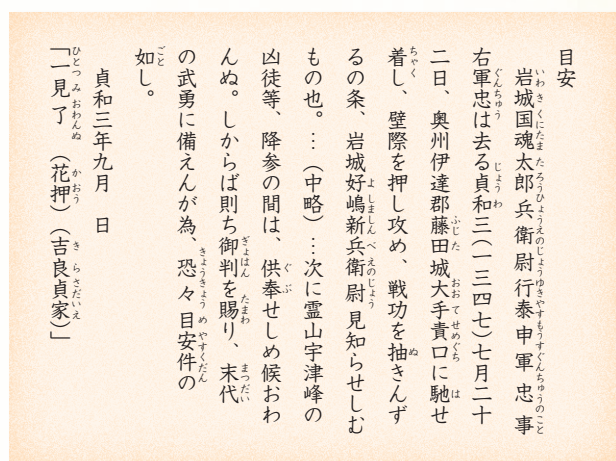
霊山を背後に控えた信達地方は東北地方最大の激戦地となりました。そのころ県内の武将たちは、北朝方が結城・相馬・岩城・国魂・伊賀・石川・信夫佐藤・岡本・会津真壁氏らであるのに対し、南朝方は伊達・田村氏で、1347年7月に藤田城(国見町)・川俣城が、同年9月までに南朝方の拠点、霊山・宇津峰(郡山市・須賀川市)も落城しました。

その後伊達氏は、行朝が1348年死去しましたが、南朝方はその後も宇津峰城をめぐり攻防をくりかえしました。しかし、1353年宇津峰城は完全に落城し、南東北での南北朝の戦いは事実上終結し、行朝の子宗遠もこのころ北朝に降伏しました。

一方佐藤氏は、北朝方の内戦である観応の擾乱(1350~52)では尊氏方に付いて直義(尊氏の弟)方との戦闘で功績があり、伊勢国(三重県)に領地をもらい、このころ本拠地を奥州信夫から伊勢に移しました。



70. 霊山



国魂行泰着到状(原文は漢文)

コラム 軍忠状と着到状

「一所懸命」という言葉があります。どんな狭い土地にも命を懸ける、という意味です。武士は、主君のために戦に参加し、命を懸けて手柄を立て、そのご褒美(恩賞)に土地をもらい、その土地を命を懸けて守るのです。

南北朝の争乱は、武士にとって恩賞をいただく絶好の機会でした。そのため、戦いに出た武士は、いつでもこの戦いに参加しました、という着到状や、どこどここの戦いでこのような功績を挙げました、という軍忠状を主君に出しました。資料の着到状は、いわきの国魂氏が藤田城や霊山城・宇津峰城で活躍し、相手を降参させる手柄を立てたことを報告する文書です。最後に吉良貞家(北朝方武将、奥州管領)が確かに確認しましたという旨のサイン(花押)があります。

数多く残る城館^{じょうかん}の意味するもの

県や市が調査をした遺跡地図や調査報告書によると、福島市内には、平安時代末から室町・戦国時代にかけての城館は100以上もあったことがわかります。城館は、この時代の上層武士^{きょうかん}の居館で、要害の地に土塁や堀をめぐらし、1～2haの面積を持ちます。城館の形態は時代によって変わってきました。

五十辺^{い がら べ}の五十目館^{い がら め の たて}や佐倉下の名倉城は、平安時代末から鎌倉時代初めの城館で、平地に造られ、ほぼ正方形で堀と土塁をめぐらし、前者は信夫庄司佐藤氏の一族伊賀良目^{い がら め}氏の、後者は信夫小治郎治重^{しの ぶ こ じ ろ う ち め}の城館と伝えられています。

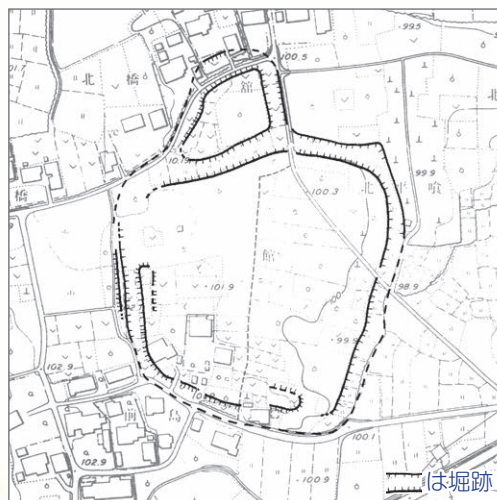
鎌倉時代末から南北朝時代にかけて、城館はしだいに山の上に造られるようになります。飯坂町^{お お と り}の大鳥城は、信夫庄司佐藤氏の居城^{きょじょう}ですが、基治^{もと は る}の時代(平安時代末～鎌倉時代初め)は、山下の平地、字館^{た て}(大鳥中学校の辺り^{きょ})に居を構えていたと考えられます。大鳥城は、14世紀～16世紀には山城として使われるようになりました。また、南北朝時代の山城の代表としては霊山城があります。

戦国時代の後半に鉄砲が伝来すると戦法も騎馬戦^{きばせん}から足軽集団戦^{あしがる}に変わり、築城法も大森城^{ちくじょうほう}のような平山城から大仏城^{だいぶつ}(杉妻城^{すぎのめ})のような平城^{ひらじろ}が主流になってきます。

このように多くの城館が造られたことは、土地をめぐる武力紛争^{ひんばん}が頻繁にあったことを意味すると思われます。



71. 名倉城跡航空写真



72. 名倉城跡略測図

名倉城

佐倉下字館

東西約190m 南北約250m

段丘面に位置

主郭は堀跡で方形に区画。

北側に外郭がある。

『福島市埋蔵文化財報告書』
第135集より

来世への祈り

平安時代の末から鎌倉・南北朝時代を経て室町・戦国時代に至る時代は、武士たちが領地を増やそうと戦いが絶えない時代でした。田畑は戦場となり、穀物は兵糧として奪われ、労働力は戦場に駆り出されました。人々は死者への追善のため、また自らの来世での極楽浄土への往生を願い、釈迦如来に合掌し、阿弥陀如来に祈り、仏像を造り、板碑を建てました。



73. 下鳥渡供養石塔 (国指定史跡)

下鳥渡字寺東

鎌倉時代中期(1258)

阿弥陀如来(中央)が観世音菩薩(右)勢至菩薩(左)とともに、飛雲に乗って亡くなった方を極楽浄土に迎えに来ている様子を浮彫で表現。



下鳥渡供養石塔・陽泉寺付近図
(木造釈迦如来坐像)



しゅじ
種子
ほんじ
梵字(古代インド文字)1字をあてて、如来や菩薩を表したもの。



74. 木造釈迦如来坐像 (国指定重要文化財)

下鳥渡字寺東 陽泉寺

南北朝期(1371)、寄木造

円勝・乗円作

胎内銘により、この地方を領した二階堂時世が開いた湖山寺(かつて陽泉寺の近くにあった)に安置されたことなどがわかる。

仏師乗円作の仏像は県内に数件残っている。



75. 医王寺の石造供養塔群 (県指定重要文化財)

飯坂町平野字寺前 医王寺

大小60数基

板碑は供養のために建てられた塔婆の一種。

年号がわかる最も古い板碑は1262(弘長2)年。

上部に種子を刻んだ板碑も数基あるが、大日如来の種子が多い。次いで阿弥陀如来。

トピック 4

つばきだて あんじゅ ず し おう 椿館と安寿と厨子王伝説

江戸時代よりもずっと昔、説教を語りながら各地を歩く人々がいました。彼等の語る演目の一つに「山椒太夫」がありました。語り伝えられてきた内容は、次のとおりです。奥州54郡の太守、岩城判官正氏は筑紫に流罪となります。その子、安寿姫と厨子王は無実を帝に訴えるため、母と旅に出ますが、途中、だまされて人買いに売られてしまいます。母は佐渡島へ売られ、安寿と厨子王は丹後由良庄の山椒太夫に買われ、姉は潮汲みに、弟は山で柴刈りにこき使われます。やがて厨子王は姉の犠牲によって山椒太夫のもとから逃れ、やがて上洛して良縁を得、帝から奥州54郡と日向国と丹後5郡を賜り、姉の敵を討ち、佐渡島から母を救い出し、故郷にもどることができました。

この伝説からわかること

この話は、あくまでも伝説ですが、この話からわかることがいくつかあります。

- ①江戸時代以前は治安も安定せず、人買いが横行していたこと。
- ②普通の人々が安全・安心に旅ができる時代ではなかったこと。
- ③人身売買により売られてきた人々は、“散所”とよばれる治外法権的な区域・施設で働かされていたこと。
- ④山椒太夫とは、散所の太夫、つまり、奴隷的労働施設の管理者を意味すること。
- ⑤当時塩づくりは、揚げ浜式塩田で、安寿と厨子王は、海水を汲み上げ、二つの桶を天秤棒に下げて運び(潮汲み)、また海水を煮詰めるため山から柴を刈ってくる(柴刈り)仕事をしていたこと。



椿館付近図

コラム 題名が「安寿と厨子王」ではなく「山椒太夫」なのは 何故？

さて、この話は、主人公は安寿と厨子王なのですが、どうして題名は「山椒太夫」なのでしょう。それは、この話が説教節として語り継がれてきたことと関係があります。山椒太夫は、子どもたちを誘拐して、強制労働をさせる施設に売り飛ばす悪い仕事をしており、子どもたちにとって怖い存在でした。言うことを聞かない子どもに「山椒太夫が来るぞ」と言うことは効果的だったのでしょう。

全国に残る安寿と厨子王伝説



コラム 森鷗外『山椒太夫』と近代の“人さらい”

この話が、現代でもよく知られているのは、明治時代の文豪
もりおうがい
森鷗外が同名の小説を書いていることも大きな理由の一つと思
われます。鷗外は自らの解説のなかで「人買いの廃絶といひげつ
近代的解決をもって素材の説教節を越える意図を企てた」と書い
ているように、まだまだ近代になっても“人さらい”“人身売買”
が社会問題の一つとしてあったことがわかります。



76. 安寿と厨子王の伝承碑(渡利字椿館)

説教節には諸説あるが、安寿の父岩城判官正氏はいわきの豪族とされ、父が筑紫に流されて、母と姉・弟が信夫の荘の椿館に住んだとも言われている。

福島盆地の中央に位置する信夫山は、御山とよばれ、神々の棲む山として人々から崇められ、親しまれてきました。人々は、五穀豊饒・悪霊退散を祈り、時には神の怒りを鎮めるため、社をつくり、寺院を築きました。信夫山には、こうした信仰に関わる多くの伝承や民俗文化財のほかに、植物や化石や地層・鉱物などの自然の産物、歌碑や顕彰碑などのほか金鉱、地下秘密工場などの歴史物語もたくさん残っています。

信夫山出土品 (県指定重要文化財 県立博物館保管)

1940(昭和15)年、月山神社再建のための作業中に、数多くの出土品が発見されました。これらは、鎌倉時代から室町時代にかけてのもので、錫杖頭などの仏具や鏡・馬具・武具などの他に1000枚以上もの中国製の古銭や釘隠などの建築金具が見つかりました。こうした出土品は、このあたりが修験の道場であったことを意味しています。



信夫山出土品
77. 左上：錫杖頭
78. 右上：古銭
79. 下：古鏡



信夫山地下秘密工場

戦争が激しくなると、戦闘機製造工場などを地方の地下に分散させる計画が進められました。一式戦闘機「隼」などを製作していた中島飛行機の分散化の一つとして、信夫山の地下工場が計画されました。信夫山地下秘密工場は、金山跡を利用した金龍工場とその西側の低い所に山根第一・第二工場がつくられました。地下工場づくりに当たっては、1000人以上の朝鮮人労働者が従事し、また福島中学の生徒たちも掘削したズリ(廃土石)の運び出しやカモフラージュ用の樹木の切り出しなどに動員されました。

工場の操業の詳細はわかりませんが、本格的な操業に入る前に戦争が終わり、その役割を終えました。福島に残る貴重な戦争遺跡です。

戦後、縦坑に落ちる事故が何度かあり、現在は入口をコンクリートで塞いでいます。



80. 地下秘密工場入口(金龍工場)



81. 奉納された大わらじ

信夫山羽黒神社の 暁参りと大わらじ奉納

信夫山羽黒神社の祭礼は、江戸時代には小正月(1月15日)に行われ、代官も参詣するほど賑わっていました。明治になって新暦が採用されると、祭りは旧正月の元旦に行われるようになり、現在は2月11日の建国記念の日に催されています。

養蚕・製糸業が盛んな信達地方は、全国から生糸商人が行き来し、生糸や蚕卵紙を運び金融業も営む飛脚問屋も常駐し、行き来する人が多かったため、旅の安全と健脚を祈り、足尾神社にわらじを奉納する風習がありました。

時がたつにつれて、奉納するわらじの大きさを競い合うようになり、次第に巨大なわらじが奉納されるようになりました。はじめは神社の仁王門に掛けられていましたが、神仏分離により仁王門が撤去されると大杉に掛けられるようになりました。

暁参りの大わらじ奉納は、福島を代表する祭りの一つです。



信夫の三狐と猫稻荷(西坂稻荷)

昔、信夫地方にはとても賢い一盃森の長次郎狐とずる賢い石ヶ森の鴨左衛門狐とそして信夫山には人を化かすのが得意なゴンボ狐(御坊狐)がおり、信夫の三狐と言われていました。ある日、ゴンボ狐が魚取り名人の鴨左衛門狐にその秘訣を聞き、冬の寒い夜にさっそく実践してみました。山麓の黒沼に行き、銀毛の尾を沼に入れて魚が釣れるのをじっと待ちました。ところが寒さで沼が凍ってしまい、尾が抜けなくなってしまったのです。最後の力を振り絞って尾を抜こうとした時、尾はちぎれてしまいました。失意の中、魔法の尾を失ったゴンボ狐は、観音様のお告げにより西坂家で飼われるようになった猫のタマに出会い、これまでの悪行を諭され改心しました。タマはネズミを捕る名人だったので、以来、一緒に蚕の天敵であるネズミを捕るようになり、養蚕農家の人たちから感謝され、後には猫稻荷として祀られるようになりました。現在では愛猫家の方々が大量訪れています。

黒沼神社・羽黒神社と六供の人たち

黒沼神社と羽黒神社の祭神は石姫命と湊中太命で、両神がこの地に来た時に供奉(お供)してきた人たちの子孫を六供といい、両社の氏子の七家を七宮人といいます。ともに両社を代々守ってきた山伏たちです。六供は年番で羽黒神社の神主を務めます。両社に奉納される太々神楽は、「御山の太々神楽」として市の無形民俗文化財に指定されていますが、この神楽を代々受け継いできたのは六供の人たちです。

羽黒神社の大鳥居に続く参道の両側にある集落は、六供と七宮人(一部は山下に住む)たちの集落です。それぞれの家には摂社と呼ばれる社があります。



82. 猫稻荷(西坂稻荷)

近代以前、人々は自然を敬い、畏れ、自然に頼り、自然に感謝しました。日常生活に活力が無くなると、神の降臨を願い、神と食事をし、神と謡い・踊り、神と練り歩きました。祭りはそうした一連の行事です。時には五穀豊饒を願い、時には悪霊退散を願いました。

福島各地では、今も、そうした祭りが行われています。

① 御山太々神楽 (市指定無形民俗文化財)

信夫山の黒沼神社と羽黒神社に奉納されてきたこの太々神楽は、金沢黒沼神社同様、日本の神話を題材にした演目を舞う神楽で、六供と呼ばれる羽黒神社の神主を務める家々の人たちによって受け継がれてきた民俗芸能です。

これまで何度か断絶の期間がありましたが、六供の人たちの努力により復活継承され、今日に至っています。29演目が継承されており、今も晩参りの日に、大わらじが奉納された後、羽黒神社で舞われます。



83. 福島稲荷神社の秋祭り・連山車集結

② 福島稲荷神社の秋祭り

福島稲荷神社は、旧腰浜村にありますが、福島藩の鎮守として多くの参詣者で賑わってきました。食物を司る豊受比売命を祭神とし、五穀豊饒・豊年満作を感謝し祈願する秋祭りは、旧暦9月10日を中心に行われてきましたが、現在はスポーツの日を中心に3日間行われます。

祭りでは、旧市内(戦前に福島市となった福島・曾根田・腰浜・小山荒井・五十辺村)の各町内会ごとに、子どもたちの「やあれ、やあれ、やあれ」の掛け声で山車がひかれ、中日には、提灯の灯った山車が二十数基集結し、太鼓の音と子どもたちの掛け声が響き渡り最高潮に達します。



84. 金沢の羽山ごもり

⑤ 金沢の羽山ごもり (国指定重要無形民俗文化財)

松川町金沢の黒沼神社では、毎年旧暦11月16日(以前は12日)から18日(新暦の12月半ば以降)に、地区の男たちが、籠り屋に入り、身を清め、穢れのない火で炊事をし、神事を行って神の声を聞く準備をします。最終日、極寒の早朝に冷水で身を清め、羽山まで走り、そして神の託宣を聞くノリワラと呼ばれる人が、来年の作柄を問いかけ、託宣を受けて行事を終わります。

③飯坂八幡神社のけんか祭り

飯坂八幡神社は、信夫庄司佐藤基治が養和年間(1181~82)頃宇佐八幡宮から武神を招請したことに始まると伝えられています。

祭りの中、若者たちに担がれた6台の太鼓屋台に先導された神輿が町内を渡御し、やがて八幡神社に入る(宮入り)時、6台の太鼓屋台を激しくぶつけ合います。ぶつけ揉み合うことで、神霊を強める効果があると言われているからです。その激しさに、この祭りは「けんか祭り」と言われています。



85. 飯坂八幡神社のけんか祭り

④大波住吉神社の三匹獅子舞ならびに鬼舞 (市指定無形民俗文化財)

2匹の牡獅子と1匹の牝獅子で舞う三匹獅子舞は、福島県内のほぼ全域で継承されている伝統芸能です。

大波の三匹獅子舞は、毎年10月、地域の鎮守住吉神社に奉納され、五穀豊饒を祈願・感謝する踊りです。3匹の獅子は、カモシカの顔をした獅子頭を被って踊ります。腰に太鼓をつけず、バチの代わりに幣束をもって踊ります。

大波地区は東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故後、大勢の人が避難したため、この獅子舞の継承も難しくなりましたが、獅子役の年齢制限や男女差をなくし、地区ぐるみで継承に努めています。



86. 大波住吉神社の三匹獅子舞

⑤金沢黒沼神社の十二神楽(県指定重要無形民俗文化財)

十二神楽は、12演目を舞う神楽で、出雲神楽ともいわれ、“天地開闢”、“日本武尊”、“天宇受売命”、“岩戸開き”など日本神話をモチーフにした寸劇を舞う芸能です。神社に伝わる資料によれば、江戸時代のはじめに氏子のうち5人を江戸に派遣して習得させたといわれます。以来、氏子の人たちが継承しています。

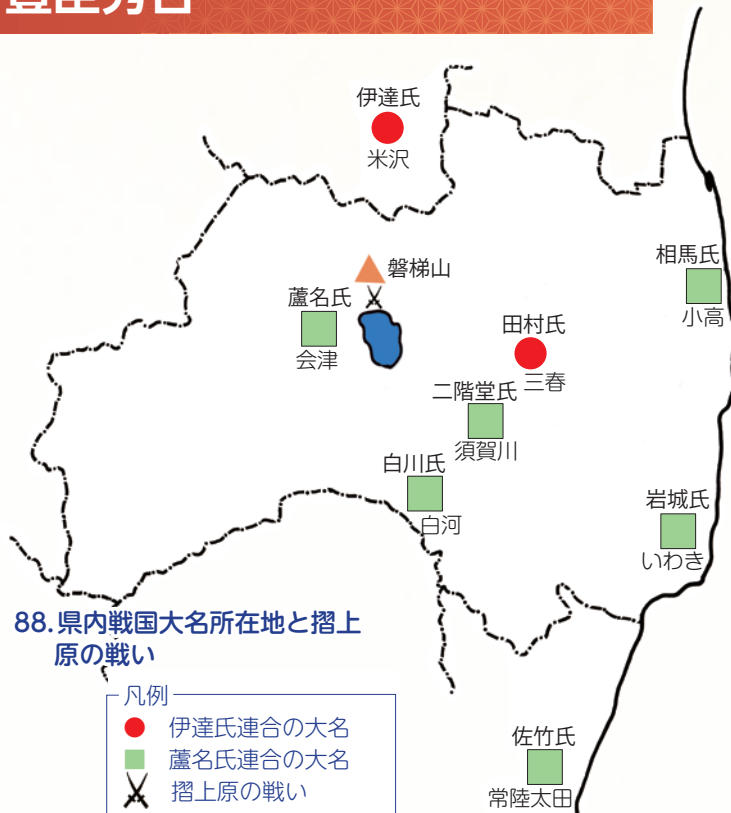


87. 金沢黒沼神社の十二神楽

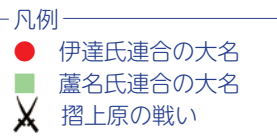
南東北の覇者となった伊達政宗

1589(天正17)年6月、伊達政宗方(2万3000余騎)と蘆名氏方(1万6000余騎)は、磐梯山の麓摺上原で戦い、伊達氏が勝利を収め、会津黒川城(会津若松市)に入りました。

翌年正月、政宗は、南東北(福島県と宮城・山形県の南半)の覇者となった喜びと自信を、仙道七郡を七草にたとえ、「七種を一葉によせて つむ根芹」と詠みました。



88. 県内戦国大名所在地と摺上原の戦い



コラム 仙道(中通り)支配の拠点“大森城”

1542(天文11)年、伊達晴宗は父植宗を西山城に閉じこめ、以後7年間伊達氏は植宗方と晴宗方の父子間の争いがありました(天文の乱)。この頃、大森城は植宗によって築かれ、その三男実元が城主となりました。

大森城は福島盆地の南西部丘陵地帯の先端部を利用した平山城で、主郭・椿館・北館・南館の4つの郭を堀が取り囲む城で、その東山麓に城下町を形成していました。

実元は、上杉定実が養子に迎えたいと願った武将でした。このことが、天文の乱の原因となったのです。なお、伊達家の家紋“竹に雀”は、この時上杉氏から贈られています。

このころ伊達氏の居城は米沢にあり、米沢と大森-八丁目(松川町八丁目)を結ぶ米沢街道が整備され、大森城下は交通の要衝として賑わいました。

実元から譲られて大森城主となった子の成実(政宗)は、政宗の右腕となって、人取橋の戦い(1585)や摺上原の戦い(1589)でその武功を誇りました。成実の後、大森城主となったのは、政宗が最も信頼していた盟友片倉小十郎景綱でした。このように、歴代の大森城主をみても、伊達氏がいかに大森城を重要視していたかわかります。



89. 伊達政宗甲冑像(狩野探幽筆 仙台市博物館蔵)

伊達政宗(1567~1636)

米沢で生まれる。幼名は梵天丸。

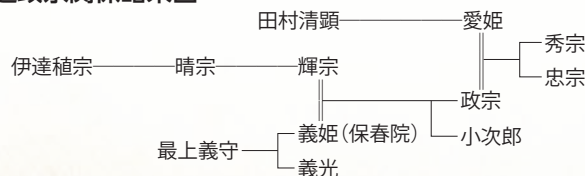
1579年三春城主田村清顕の娘愛姫と結婚。

1584年家督相続。

政宗の甲冑の三日月の前立と背後に翻る日輪の軍旗は、父輝宗が政宗誕生の際に伊達家棟梁の印に制定。

大日如来に通じるものとされている。

伊達政宗関係略系図



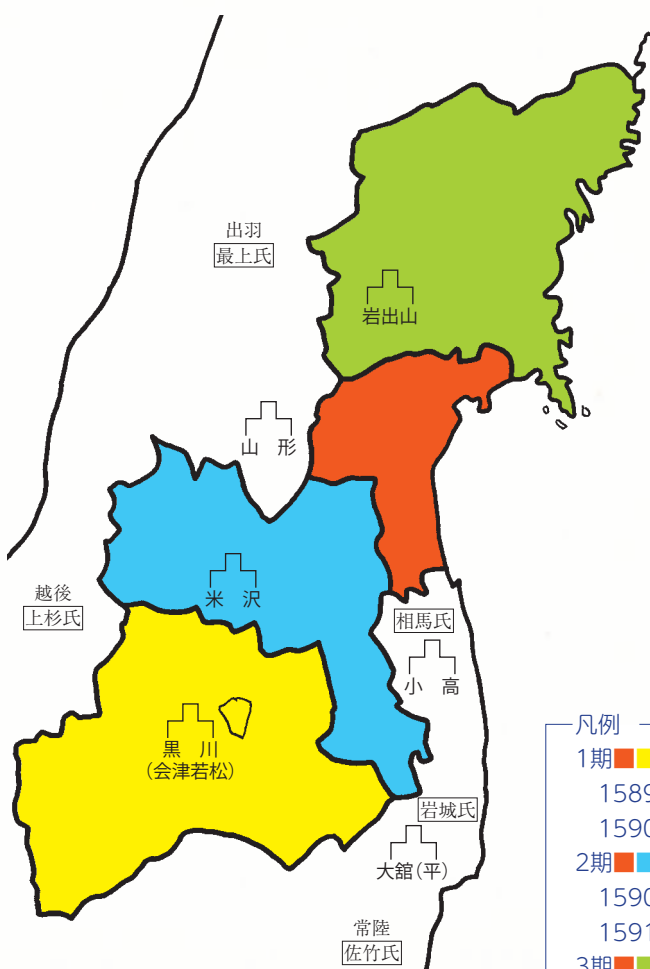
奥羽仕置

1587(天正15)年、島津氏を倒して九州を平定した豊臣秀吉は、関東・東北の大名に対して、今後の戦争は私的な紛争であるとして禁止する惣無事令を出しました。

1590(天正18)年、秀吉は、天下統一の最後の戦いとなる小田原城に北条氏を攻めました。この時秀吉は、大名たちに小田原に来ることを命じますが、政宗は遅れて到着し、摺上原の戦いが惣無事令違反に問われ、会津に帰ると早々に、会津黒川を明け渡し、米沢城に戻りました。

小田原城を落とした秀吉は、この年8月、白河から勢至堂峠を越え、会津に入り、天下統一の総仕上げである奥羽仕置(東北の大名の処分と配置替え)を行いました。その結果、会津には蒲生氏郷が92万石で入りました。秀吉は、この时会津の地で、どんな山奥でも、離島でも徹底して検地を行うように命じる太閤検地令を出しました。

翌年宮城県北部で葛西・大崎一揆が起きると、秀吉は奥羽再仕置を行い、政宗は米沢から岩出山に移りました。この時、信達地方は蒲生氏の支配に入りました。



90. 伊達政宗支配領域変遷図

コラム 政宗小田原遅参の理由と秀吉への謁見

1590(天正18)年、秀吉の再三の小田原出陣要求に、政宗は参陣の出発日を4月6日と決めました。

出発の前日、母保春院に招かれ、黒川城内西館で勤めのままに食事したところ、激しい腹痛に襲われました。溺愛する弟小次郎を政宗に代わらせようとする母の陰謀でした。政宗は、母を斬ることはできないと弟小次郎を斬り、小田原に向かったのは5月9日、一カ月以上も遅れての参陣となりました。

6月9日政宗は初めて秀吉に謁見しました。この時秀吉55歳、政宗24歳。年齢も経験も圧倒的な差がありましたが、政宗は髪を水引で結び、死装束の姿で秀吉の前に出ました。秀吉は、持った杖で政宗の首を突きながら、「もう少し遅かったら、ここが危なかった。」と言ったという話が残っています。

凡例

1期

1589(天正17)年6月摺上原の戦い～
1590(天正18)年8月奥羽仕置前まで

2期

1590(天正18)年8月奥羽仕置～
1591(天正19)年葛西・大崎一揆平定後の国替えまで

3期

1591(天正19)年葛西・大崎一揆平定後の国替えから